

ウィーヌの原型

野村, 知佐子

<https://doi.org/10.15017/10040>

出版情報 : Stella. 20, pp.59-69, 2001-09-10. Société de Langue et Littérature Françaises de
l' Université du Kyushu

バージョン :

権利関係 :



ウィーヌの原型

野村 知佐子

ベルナノスの処女作『悪魔の陽の下に』(1926年)では判然としなかった聖なるものと人間的なものとの差違は、つづく『欺瞞』(1927年)と『歎び』(1929年)の登場人物である、シュヴァンス、シャンタルというふたりの聖人と懐疑的なセナーブルのなかで明確になったといえる¹⁾。一方、作家によって『闇』として構想されたこれらの作品の主題が、聖なるものと悪魔的なものとの葛藤であるとき、そこには後に『ウィーヌ氏』(1943年)で完成を見せる人物の形を与えられた悪の姿をもまた垣間見ることができる。『欺瞞』のゲルーと『歎び』のフォードルである。本稿では、『ウィーヌ氏』を「汚れ」に浸食された作品と見なすとき、このふたりの人物がいかにか「汚れ」を体現し、ウィーヌ氏の先駆けとなっているかについて検討したい。

*

セウン・ストルーヴは『ウィーヌ氏』における悪の蔓延を「汚れ」と捉え作品を読み解いている²⁾。彼はポール・リクールの「汚れ」に関する論述を援用するが、それによれば「汚れ」とは「流血による汚れ」と「性的なもののもつ汚れ」である。前者の汚れは牛飼いの少年の殺害であり、この流血によってフヌイーユの教区全体に悪が蔓延するという。一方、後者の汚れを体現しているのは村長アルセーヌの匂いに対する強迫観念であると彼は指摘する。なるほど、青年時代に犯した性的過ちへの罪悪感から、絶望的に世界の汚れを訴えつづける彼の姿は「性的な汚れ」を体現するにふさわしい人物といえる。だがフヌイーユの村の「汚れ」の源がウィーヌその人であるとき、ふたつの形の「汚れ」はむしろこの人物に帰属させられるべきではあるまいか。こうした見地にたって「性的なもののもつ汚れ」をウィーヌのなかに探すと、少年時代に彼

がうけた歴史の教師からのホモセクシュアルな誘惑が挙げられる。このできごとが孤独の苦しみのなかにいた少年ウィーンを悪魔的な誘惑者へと変質させ、彼を殺人へと駆り立てるとすれば「性的なもののもつ汚れ」とはむしろ「誘惑」であり、その結果として生じるものが「流血」であるといえまいか。

このようにウィーンのもたらす「汚れ」を、「流血」を伴う「誘惑」として捉えるとき、「汚れ」は『欺瞞』のゲルーと『歎び』のフォードルにおいてどのように体现されているのだろうか。

1. ゲルー

わずか3本の小説を上梓した後、文筆活動から身を引いたゲルーは自分の家をサロンとして人々に開放している。書く行為には必ずや対象を凝視する必要性があるとき、サン・マランやセナーブルがそうであるように、ゲルーもまた認識の魔に憑かれた人物であることは次の引用に表れているといえよう――

この奇妙な男ほど、ありふれた事件や言葉、眼差しからさえも、そこに含まれている真の苦痛や潜在的な悲劇を引き出すことのできる者はいない。わずかな震えや苦痛の小さな波はこのように、絶対に誤りを犯すことのないその感覚によって感知され、彼の並外れた感性は精巧な受信機のようにそれをとらえるのだった。〔…〕鋭く貪婪な好奇心が感じとる不幸は、知らず知らずの内に彼に感化を及ぼしていた。ちょうどそれとは気づくことなしに、ある一定の隠された欲望の対象に近づくと、その官能が蠢きはじめる女性のように。[I, 391]

ゲルーの不幸への洞察力は「受信機」という言葉で表現されるが、ウィーンもまたその最期のときスティニーに自分の観察眼の狂いを語る際に「精巧な機械」[O, 1547] という表現を用いる。存在そのものが認識する機械へと変貌したかのようなこの表現は彼らの実存の非人間性を物語るものであるといえよう。生きながらにして伝説となり退廃的な生活に身をゆだねたこの人物において最も特徴的なのはかつての美を著しく損なう脂肪であるが、フィリップ・ル・トゥーゼはそれについて次のように述べる――「脂肪 graisse」という言葉は作中4度用いられるが [I, 339, 427, 428, 430]、これは同時にセナーブルの欺瞞について語る時にも用いられるものである。すなわち欺瞞とはセナー

ブルの「血によって癌細胞のようにみごとに自身を肥やす (s'engraissera) 怪物」[I, 329] であるとすれば、この司祭において単なるメタファーにすぎなかったものは、ゲルーにおいては完全に肉体的な特徴となっている。つまりゲルーの肥満とは罪の象徴そのものであると。さらにル・トゥーゼは、ゲルーの墮落は「伝説の獣のように自分自身を貪り」[I, 426], 「見るという行為によって見つめられる対象そのものを吸収し尽くしてしまうほどの内省」[I, 426] のなれの果てであるとする³⁾。ル・トゥーゼのこの指摘のようにゲルーの肥満がその倒錯した内省の末路であるとき、彼のサロンとは彼がその欲望を満たすための場に過ぎないといえよう。とすればゲルーがそこに集う人々の内面性を知り抜いていてもそれは当然であり、望みさえすればいつでも彼らを精神的危機に陥れることができるのである。じじつゲルーの言葉はサロンの老人たちを慄然とさせる――

「いつもあなたのお話を伺うと刺激になります、なぜならあなたは私が失ったと思っている芸術の秘訣を心得ておられますから。真剣ななかで戯れて見せ、戯れのなかで真剣になるというあの秘訣を」[I, 393-394]

「君 [=ペルニション] が同情を求めていることは見て取れる。君は同情によって歪んでいる。その種の病的な強迫観念ほど危険な悪徳は存在しないぞ」[I, 399]

最初の言葉を投げかけられたラヴォワヌ・ド・デュラスは一瞬不安の色を隠しきれない。2番目の言葉はペルニションに対して発されたものではあるが、老人たちがこの青年を排斥し始めた原因がサロンでの馴れ合いの平和を守るためであったとすれば、同情への病的な嗜好とはそこに集う人々全ての悪癖にほかならない。したがってこの言葉はペルニションのみならずサロンに集うほとんど全ての老人たちにとってもまた脅威なのである。

このように、ペルニションが虚栄心からついた小さな嘘のために、彼を憎みはじめたカタニとの間に諍いが持ち上がったときも、居並ぶ老人たちが早くそれに終止符を打ちたいと動揺するなか、ひとりゲルーはそれを興奮した面持ちで見守り、ペルニションが怯むとき「へまな闘牛士にたいして観客が見せるような」[I, 403] 失望のしぐさを見せる。ペルニションが「闘牛士」⁴⁾ であるとき、ゲルーにとってはこの「闘牛士」を新たな戦いに駆り立て、より一層苦し

めることがその最大の歓びであるといえよう。彼がカタニを庇うとすればそれはこの老人の味方をするためではなく青年を苦しめるためなのである。ゲルーのこの欲望は、セナーブルやカタニに見捨てられたペルニションがジャーナリストとしてのキャリアを守るべく最後の望みを託して彼のサロンを再び訪れたとき剥きだしになる——

「君は詫びを入れるためにここに来たのではあるまい：そんなものならもうさきん受けた！だが真摯で見事で率直な苦しみ——つまり敢えていえば——無垢の苦しみ、黄金のように無垢の苦しみを捧げてくれる者は稀だ」[I, 429-430]

ゲルーはペルニションが彼に「無垢の苦しみ」を捧げることを望む。なぜなら相手の苦しみを堪能することに彼は無上の歓びを見いだすからである。こうしてゲルーはカタニにとって著しく不利に働くであろう書簡の束を差しだし、ペルニションに復讐をけしかける。ル・トゥーゼは、ゲルーのこの行為は逆にペルニションを破滅させるものであることを指摘する⁵⁾。彼は復讐という行為が明らかにペルニションの力に余るものであることを見抜いていた。その上で復讐をけしかけた彼は、それを拒絶するペルニション目の前でその書簡の束に火を放った後、自分の苦しみを差し出すことに躊躇するこの青年に代わってその苦しみを語り始めるのである——

恐れ最初の動きにもかかわらず、彼 [=ペルニション] は自分の深い、秘め隠された思いが自分以外の者の口からなされるのを聞いていた、そしていいようのない安らぎを覚えた。[I, 433-434]

ここでペルニションの感じたものがたとえ安らぎであろうと、ベルナノスの作品世界において、自身の苦しみが他者の口から語られることが破滅的な結果をもたらす例は随所に見受けられる⁶⁾。ル・トゥーゼは人間の苦しみとはキリストの受難の似姿であるがゆえに、それを官能的な対象と見なすことは冒瀆行為であるとするが、この行為こそ「汚れ」の浸食に他ならない⁷⁾。先に挙げたウィーヌ氏の少年時代のエピソードも物語っているように、他者の苦しみに好奇心を抱きそれを堪能することは凌辱行為に等しいといえよう。

こうしてこの凌辱行為はペルニションの自殺という「流血」を招来する。か

つてこのサロンと関わりをもったダルデルという若い神父が命を落としたことを特筆すべきであろう。ペルニションと同様、カタニと事を構えた彼はベルギーに逃れ還俗し妻帯して暮らすも、やがて絶望にとらえられ自ら死に赴く。過去にダルデルが死に、今ペルニションが命を落とす。これは未来にも新しいダルデルやペルニションが命を落とすことを意味するといえよう。この恐るべき反復を堪能するため、ゲルーのサロンには新たに野心に燃え、才能に溢れてはいるが脆弱な青年が補給されることであろう。青年を苦しめるための道具である老人たちにしてもまた同様である。彼らがゲルーに官能的な歓びを与えるためにしか存在していないとすれば、疑いもなく彼のサロンは『ウィーヌ氏』におけるフヌイーユの教区の雛形であるといえよう。

2. フォードル

ポール・デルヴォーは、フォードルがベルナノス描く全ての登場人物のなかで最もドストエフスキー的であると述べ、じっさいこの人物がロシアの文豪と同様の名を冠すこと、銃殺刑に処せられるもかろうじて一命をとりとめるというその経歴においてもドストエフスキーを彷彿とさせることを挙げている⁸⁾。この人物が物語に現れるとき、彼はすでにひとつの誘惑を終わらせている。クレルジュリ家の使用人であるフランシーヌは彼との関わりを通じて絶望に陥る。彼女を気遣う料理女のフェルナンドに詰め寄られたとき、フォードルは次のように答える――

「あの娘も前は単純で新鮮で田舎風で、まぐさの匂いがした。私は弟のようにあの娘を抱擁してやりたかった。ところがどうだ、このごろは手に負えない。あの娘は自分の本性を否定して、昔ながらの嘘のなかに入り込んでしまった。私とあの娘と、どちらが変わったというんだ？」 [J, 622]

「女ならすぐに不幸というものがわかるはずだ。きつとどの女のなかにも悲しみの泉のようなものがあるのだ。だから男は地下のその水脈を求める。ところがフランシーヌは一息にその泉を枯らしてしまった。つまらん小さな泉だったということだ」 [J, 623]

最初の引用に見られるフランシーヌの変貌は『ウィーヌ氏』におけるネレイス

夫人の変貌を思い起こさせる。かつては人に愛される女性であった彼女はウィーヌ氏との出会いの後、村人たちの憎悪をかき立てるような人物へと変貌するが、フランシーヌもまた素朴な田舎の娘から酒や薬に溺れ不幸に浸る女性へと変貌したのである。2番目の引用からフォードルは、ゲルーがベルニシヨンの「苦しみ」を堪能したようにフランシーヌの「悲しみの泉」を堪能したことが伺える。他者の苦しみを堪能する行為がほとんど凌辱行為に等しいとき、フランシーヌの絶望は当然であるといえよう。

しかしながらここで、ゲルーにおいて誘惑そのものが描かれていたのに対し、フォードルにおいては誘惑の結果が描かれることで2人の誘惑者には差違が生じる。その差違とは誘惑者の質的側面と量的側面との差違であるといえようが、これはシャンタルの介入によって生じるものである。つまりゲルーがサロンの老人たちやベルニシヨンという凡庸な人物にしか接さず、彼らを堪能するだけだったのにたいし、フォードルは聖なる属性をもつ人物と対峙しなければならない。したがってゲルーの姿が「汚れ」をもたらすというその「質」として捉えられるのにたいし、フォードルの姿はシャンタルとの邂逅までに「汚れ」伝染させた「量」として捉えられることになる。貴族の夫人との情交や薬の常用をはじめとするその経歴にもかかわらず、フォードルの官能的な匂いはゲルーほどには濃厚でないのはこのためであると思われる。

このように誘惑者としての量的な側面が強調されるとき、フォードルの姿は自身の過剰なエネルギーを持て余し、対象から対象へと彷徨する姿となる。その過剰ゆえに、彼は過剰の別形態である聖なるものと接点を有しており、シャンタルに強く魅きつけられるのである。じじつ父親のクレルジュリ、彼から招かれた知識人たちや使用人らがシャンタルの聖性に気づかぬとき、フォードルだけがそれをかぎつける。彼女が脱魂状態になって眠っているところに現れた彼はことさらに自分が彼女の秘密を捉えたことを強調してみせる――

「私は下劣な人間で神を全く信じていません。しかしどうして私はあの最初の晩、探したわけでもないのにあなたを見つけてしまったのでしょうか。他の人間ではなくなぜこの私が。他の誰だってあのドアを押してみることができたはずだ。それなのになぜこの私が。聖女とか脱魂状態などという言葉に意味があるとしたら、あなたこそ脱魂状態にあった聖女なのです」[J, 547]

別の箇所では「話し手と自分とを共犯者に、つまり同じ秘密の共犯者にしてしまう」[J, 576] 人物として表現されるフォードルは、自分が「下劣な人間で神を全く信じて」いないと豪語するにもかかわらず、シャンタルの聖性の発見者であることを強調し、「下劣な人間」と「聖女」との間に共犯関係を築こうとする。フォードルが目論むものは聖なるものと悪魔的なものとの混淆であって、これが成し遂げられるとき、シャンタルもフランシーヌと同様の変質を被ることになる。シャンタルの聖性が汚されるときは悪魔的なものへの変質となろう。ベルナノスの描く人物は、しばしば対峙することによって互いのなかに互いの似姿を発見するが多いが、シャンタルとフォードルのこの対峙は相反する属性の所有者同士のそれである。彼らに共通点があるとすればそれは先に述べたようにその過剰なエネルギーという量的側面に過ぎない。

しかるにこのような、属性を異にする人物同士の対峙の場面は『ウィーヌ氏』において数多く見受けることができるが、そのひとつとしてウィーヌとフヌイユの司祭との対話をあげることができる。ウィーヌは司祭に語る――

「ええ！ 私はモラリストではありません。悪は悪です。むしろ悪がお上品な心をかき乱すような事件がもちあがればいいと思っているほどです。私は悪の匂いを恐れません。ところが連中はこの慎ましやかな村をがらくた市か緑日のようなものにしてしまっている。そこでは何もかもごちゃまぜに陳列されて、善も悪もひどい無秩序のなかに置かれています。これはあなた、耐えがたいことです」[O, 1467]

フォードルがシャンタルにたいして抱いた共犯者意識とは、聖なるものと悪魔的なものとの混淆であるとき、それはまさにこの引用でウィーヌ自身が語っている「善も悪もひどい無秩序のなかに」におかれる状態にほかならない。しかるにこの「無秩序状態」を弾劾する言葉が、その状態を作り出した者の口から語られる。しかもそれは聖なるものの担い手である司祭にたいしてなされるのである。ウィーヌ氏と司祭の間には共に教区の乱れを嘆く共犯関係が成立する。これこそ聖なるものにたいする「汚れ」の浸食を示すものであるといえよう。

このように聖なるものと悪魔的な者が対峙しあうとき、それは前者が後者を峻拒するか後者が前者を呑みこむかのいずれかであり、シャンタルはフォードルを拒否することとなる。ル・トゥーゼが指摘するように、ベルナノスは両者

のこの対峙を、荒野における悪魔とキリストととのそれに触発されて描いたのである⁹⁾。悪魔がキリストに、奇跡によって救世主であることを人々に示すよう誘惑するとき、キリストはそれを神を試みる行為として退ける。シャンタルもまた彼を救うことによって聖なるものであることを示すよう迫るフォードルにたいして次のように答える――

「ここでもよそでも、いつでもどこでも罪はたったひとつしかなかったのだから。
——どんな罪です？ 神を試みることよ」[J, 549]

この拒絶によってフォードルには彼女の聖性を「汚す」ことが不可能となり、シャンタルに、完全に悪として対峙することを余儀なくされる。こうして聖なるものと接点をもつことの叶わぬフォードルは、絶望してシャンタルを殺害するという「流血」へと至るものである。

ところでペルニションにおいて、ゲルーによる「誘惑」の過程がクローズアップされるのにたいし、彼の自殺という「流血」への言及はわずかである。彼の死は『欺瞞』の最後にひとつの情報としてつけ加えられるだけである。聖なるものの汚されつづける『ウィーヌ氏』という作品世界において、牛飼いの少年の死とはフヌイユの村を汚す単なる「流血」のひとつに過ぎないとき、ペルニションの死もまたゲルーのサロンに新たな「汚れ」をつけ加える一事件にすぎず、セナーブルの心を動かすことすらない。これにたいして、フォードルのフランシーヌへの誘惑はすでになされた後であり、シャンタルにたいするそれは功を奏さないの「誘惑」の過程はここでは言及の対象にもなりえないが、シャンタルの死という「流血」はクローズアップされる。この「流血」が「汚れ」による聖なるものの侵犯であることは疑いえない。しかしウィーヌ氏が聖なるものなかに巧みに入りこんだため、それが汚されてしまったのとは対照的に、フォードルは悪として聖なるものであるシャンタルと対峙するがゆえに、彼がシャンタルを殺害するも、その破壊行為は彼女の聖性を何ら傷つけることはないといえよう。もちろん彼はこの殺害によって彼女の生を決定的に汚しはした。しかしキリスト自身が罪人として最も汚辱に満ちた死を死ぬことによって原罪を贖ったとすれば、彼女のこの不名誉な死もまた購いへと転化するものである¹⁰⁾。それゆえにシャンタルの死はセナーブルを再び神に向かい合わ

せるという奇跡を生むといえるであろう。

以上のようにゲルーの君臨するサロンとは「汚れ」の蔓延する小世界であり、ウィーヌ氏の支配するフヌイーユの教区の雛形である。一方ウィーヌが聖なるものである子供時代さえ汚染してしまうような存在であるならば、「汚れ」による聖なるものへの挑戦はフォードルにおいてはじめて人物の形を取ったといえるだろう。

結 語

ゲルーを誘惑の質的側面、フォードルをその量的側面として検討したとき、両者は共にその「汚れ」によって聖なるものを浸食するには至っていないことがわかる。聖なるものさえ浸食するほどの悪魔的なものは、ベルナノスの最後の小説においてはじめて実現されたということができよう。しかもウィーヌ氏には、若くして栄光に輝き現在は退廃的な生活を送るゲルーの凋落、銃殺から一命をとりとめたという過去を持つがゆえのフォードルのニヒリズムさえ感じられない。かつては語学の教師であり現在は寄食者の身の上であるウィーヌは、その外観上の凡庸さにもかかわらず、フヌイーユの教区崩壊の引き金である殺人の実行者である。こうした意外性を描き出すためには推理小説の手法こそもっとも似つかわしかったのではあるまいか¹⁾。だとすればベルナノスは、自身では失敗作であるとした推理小説『悪夢』と『ある犯罪』の制作を通じて、より純粋な悪を描くための手法を洗練させていったとはいえまいか。

註

- 1) 『欺瞞』と『歎び』及び『ウィーヌ氏』のテキストとしては、プレイアッド版『小説集』(Georges BERNANOS, *Œuvres romanesques*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1988) を使用し、同版からの引用にあたってはそのページ数のみを [] 内に記す。訳出にあたっては山崎庸一郎訳(『ベルナノス著作集』第1巻, 1976年)と、渡辺義愛訳(『ベルナノス著作集』第3巻, 1979年)を参照した。なお、それぞれの作品を区別するために、[] 内ページの前に『欺瞞』はI、『歎び』はJ、『ウィーヌ氏』はOを記す。

- 2) Voir Seven STORELV, «La souillure dans *Monsieur Ouine* ou la résurgence d'une religion primitive», in *Bernanos et l'interprétation*, Paris : Klincksieck, 1996, pp. 139-147.
- 3) Voir Philippe LE TOUZÉ, *Le mystère du réel dans les romans de Bernanos*, Paris : Libr. A.-G. Nizet, 1979,
- 4) Voir *ibid.*, pp. 141-142. ペルニションが「闘牛士 toréador」という言葉で表現されるのにたいし、シャンタルは自分自身のことを、皆が「猛獣に食べられるところを見たいと望んでいる」「猛獣使い dompteur」に喩える。彼らの一方は虚偽に死に、他方は慈悲のために死にはするが、両者ともセナーブルの犠牲者である。そしてペルニションがセナーブルの心さえ動かすことができず虚しく死んでいくのなら彼は「恩寵に恵まれぬ」シャンタルであるということができるとル・トゥーゼは述べている。
- 5) Voir *ibid.*, p. 142, note 2.
- 6) 他者による秘密の露呈が、ベルナノスの登場人物にとって危険な意味をもつことは断るまでもなからう。ペルニションとゲルーの関係のみならず、「悪魔の陽の下に」のムーシェットはドニサン神父によって彼女の秘密を語り尽くされることで、「新ムーシェット物語」のヒロインは香具部屋の老女の言葉によって死に導かれている。
- 7) Voir LE TOUZÉ, *op. cit.*, p. 113.
- 6) Voir Pierre-Paul DELVAUX, «Le mal et les personnages», in *Études bernanosiennes 15*, Paris : Lettres Modernes Minard, 1974, p. 50, note 18. デルヴォーはドストエフスキーの人物が我々の目にその正体を明らかにするのにたいし、フォードルの姿は空かされないままに終わると指摘している。なおル・トゥーゼは、ドストエフスキーが銃殺の刑を宣告されるも、特赦によってかろうじてそれを免れたのにたいし、ベルナノスはフォードルが実際にその刑を受けるところまで物語を押し進めていることをつけ加えている (voir LE TOUZÉ, *op. cit.*, p. 114, note 1)。
- 9) Voir LE TOUZÉ, *ibid.*, p. 113. シャンタルのモデルが聖テレジアであることは知られているが、彼女の単純さを目にするだけで心を引き裂かれ、彼女を嫉妬深くつけねらう老人たちに取り囲まれたシャンタルの姿は、司祭たちによって裁きを受けるジャンヌ・ダルクのそれでもある。なお、セナーブル神父のモデルはアンリ・ブルモンであることもまた周知のことである。ベルナノスは彼の著作を読み、そこからインスピレーションを得ているが、一方ブルモンは、フレデリック・ルフェーブルのインタビューのなかで、ベルナノスが彼の著作を読んでいることを否定している。
- 10) 『欺瞞』の最終章である第4章はシュヴァンスが死の苦しみのなかで熱に浮かされ、セナーブルに再び邂逅し彼を神のもとに立ち返らせようとする幻覚を見る場面が大半を占めている。ミシェル・エステーヴによれば、シュヴァンスの死もまたセナー

ブルの罪を贖うためのものである。Voir Michel ESTÈVE, «L'agonie christique de Chevance», in *Paradoxes et permanence de la pensée bernanosienne*, Paris: Aux amateurs de livres, 1989, pp. 57-69.

- 11) 1934年に経済的な理由からベルナノスはプロン社のピエール・ベルペロンにふたつの推理小説を書くことを約束した。それが『ある犯罪』と『悪夢』である。ベルナノスがシムノンを愛読していたことは知られている。Voir René GARGUILO, «Bernanos et le roman policier», in *Bernanos et le monde moderne*, Lille: Presses Universitaires de Lille, 1989, pp. 109-117.